

非限定的名詞修飾節におけるテイタに関する一考察

A Study on the Meaning of 'teita':

Focusing on the Non-restrictive Noun-modifying Clauses

王 守利

WANG Shouli

要旨 本稿は非限定的名詞修飾節と主節との意味関係からテイタが含まれる名詞修飾節と主節の関係を確認しながら、非限定的名詞修飾節におけるテイタの意味を考察してみた。

テイタが含まれる非限定的名詞修飾節と主節との関係としては、付帯状況、逆接・対比、原因・理由などが挙げられる。また、非限定的名詞修飾節と主節の関係によって、名詞修飾節のテイタの意味が違っていることが分かった。具体的にいうと、「付帯状況」の場合は、名詞修飾節のテイタが「動作の持続」「結果の持続」の意味を表し、「逆接・対比」の場合は、名詞修飾節のテイタが「途切れ」の意味を表し、「原因・理由」の場合は「パーフェクト」の意味を表す。また、タ形が含まれる非限定的名詞修飾節と主節との関係との比較にも触れた。タ形が「継起」の関係を顕著に表しているのに対し、テイタ形は「継起」の関係を表さない。一方、テイタ形と（動詞の）タ形は「逆接・対比」の関係を表しているが、アスペクトの意味が違うことも窺える。

1. はじめに

名詞修飾節¹⁾のテイタに触れた研究は、中畠孝幸（1995）、秋月康夫（2003）、須田義治（2005）、王守利（2014）などが挙げられる。拙稿では先行研究（中畠孝幸（1995）、秋月康夫（2003）、須田義治（2005）など）を踏まえ、テイタの「途切れ」の用法を実例の調査を通して確認した。また、名詞修飾節のテイタの意味を判断するのには、主節の述語との関係を考慮に入れなければならないことがわかった。しかし、具体的に名詞修飾節と主節との関係、および名詞修飾節のテイタとの関係はどうなるのかは、課題として残されていたままであった。

そこで、本稿では、前稿の課題を承け、名詞修飾節と主節との関係を考慮し名詞修飾節におけるテイタを考察してみる。名詞修飾節は非限定的名詞修飾節と限定的名詞修飾節に分けている。本稿はまず非限定的名詞修飾節と主節の意味関係を確認しながら名詞修飾節

¹⁾ 名詞修飾節を含む複文を考察するには、名詞修飾節、主名詞（被修飾名詞とも言う）、主節の述語という三つの要素を考慮し、この三つの関係を明らかにしなければならない。

今までの研究では、名詞修飾節と主名詞の研究はまず寺村秀夫（1980）が挙げられる。寺村秀夫（1980）は名詞修飾節と主名詞の関係には「内の関係」と「外の関係」があると指摘し、後の研究に大きな影響を与えている。その後、益岡隆志（1994）、益岡隆志（1997）、庵功雄他（2001）、大島資生（2003）、日本語記述文法研究会（2008）などのように「内の関係」と「外の関係」の研究とそれに関わる主名詞の研究が相次いで出されている。

また、名詞修飾節の述語と主節の述語との研究は、主に複文（連体修飾節を含む）のテンス（時制）をめぐる展開されているが、その中でも三原健一（1992）が提唱した「視点の原理」がよく知られている。そのほかに、中畠孝幸（1995）、岩崎卓（2001）、須田義治（2005）、日本語記述文法研究会（2007）などの研究も挙げられる。

のテイタの意味を考察してみたい。

2. 先行研究

名詞修飾節と主節との意味的關係に関する研究は益岡隆志（1997）、庵功雄他（2001）、日本語記述文法研究会（2008）などが挙げられる。こうした先行研究の多くが非限定的名詞修飾節をめぐって主節との意味關係を論じている。

まず、益岡隆志（1997）は非限定的連体節表現を具体的にどのような情報付加を行うのかを観察している。

「非限定的連体節表現の機能には、大別して二つの系列のものがある。一つは主節（または、それに準じるもの）で表されている事態に対する情報付加であり、もう一つは主名詞に対する情報付加である。」（益岡隆志（1997：168））

益岡隆志（1997：168）では、主節の事態に対する情報付加には主なものとして「対比・逆接」²⁾、「継起」³⁾、「原因・理由」⁴⁾、「付帯状況」⁵⁾の關係が挙げられている。それに対し、一方の主名詞に対する情報付加⁶⁾とは、談話の冒頭でと談話の途中でよく使われ、名詞を文脈に導入するに当たって必要となる予備的、背景的情報を連体節によって与えるものである、と述べられている。また、情報付加の働きをしているとは考えられない非限定的連体節表現を「述定的装定」⁷⁾の表現と呼んでいる。

庵功雄他（2001）は、内の關係の名詞修飾には、制限的名詞修飾と非制限的名詞修飾があると指摘している。非制限的名詞修飾は名詞修飾節と主節とが「継起」、「付帯状況」、「理由」、「逆接」といった意味的關係を持つ場合に用いられ、この四つの用法はいずれも主節の出来事や動作が起こる背景的な状況を表しているという点で共通していると述べている。これは益岡隆志（1997）の説明に非常に似ている。相違点といえば、庵功雄他（2001）

²⁾ たとえば、益岡隆志（1997：168）は以下の例を挙げている。

（1）スタート時、最近の高校生を教えるのは難しいのでは、と不安だったという染丸師匠は、……今やノビノビ授業に取り組んでいる。（神戸新聞1993・6・14）

この例では、連体節で表されているスタート時の状況が主節で表されている今の状況と対比されている。

³⁾ たとえば、益岡隆志（1997：169-170）は以下の例を挙げている。

（2）控え室に戻った私は、9分間、時間を過ぎたことを係りの人にわびた。（「マンボウ酔族館」）
この例では、連体節の事態が起こったことに続いて主節の事態が起こるという関係になっている。つまり、控え室に戻った後に係りの人にわびたという時間関係になっているのである。

⁴⁾ 連体節と主節の間に因果關係が認められるものが挙げられている。たとえば、益岡隆志（1997：169）は以下の例を挙げている。

（3）責任を感じた功一は金の工面をまさ子に頼ることにした。（神戸新聞1993・6・1）

⁵⁾ たとえば、以下のような例である。

（4）血の気が引いていく思いで出場者を見上げていた勇の肩を、金村が強く叩いた。
（高橋三千綱「九月の空」）

⁶⁾ たとえば、益岡隆志（1997：170）は以下の例を挙げている。

（5）コカイン密輸事件で逮捕、送検された角川書店社長の角川春樹容疑者は、父親の源義氏ともども異色の俳人として名が通っている。（神戸新聞1993・8・31）

⁷⁾ 連体節が形式の上では名詞を修飾する「装定」の表現になっているが、意味内容からすると、「述定」として機能しているものである（益岡隆志（1997：173））。たとえば、益岡隆志（1997：172）は以下の例を挙げている。

（6）身内の病人を秘して公務出張に精励している局長に一種の感動を覚えた。（松本清張「中央流沙」）

では、各々の説明に名詞修飾節の述語がどんな形をとるかの説明が付いている程度に過ぎない。つまり、「継起」の場合では、名詞修飾節の述語は動作的な動詞に限られ、タ形を取り、「付帯状況」の場合は、結果状態を表す動詞のテイル形かタ形、または形容詞であり、「理由」と「逆接」の場合は特に制限がないと述べている。また、話の脇筋を名詞修飾節で表現することによって、本筋を明確にするためだという非制限的名詞修飾を用いる理由をも説明しているが、これは会話で用いられる先触লেরな非制限的名詞修飾は聞き手に対してスムーズに情報伝達を行う上での配慮とされる。

さらに、日本語記述文法研究会（2008）では、機能の面で名詞修飾節が限定的名詞修飾節と非限定的名詞修飾節に分けられる。そして、非限定的名詞修飾節は、名詞についての補助的な情報の付加、主節の事態に対する背景的な事態の提示、主節の述語が要求する事態の提示という働きをすると述べ、詳しく説明している。その中で、名詞についての補助的な情報の付加は益岡隆志（1997）でいう談話の冒頭や途中で用いられる主名詞に対する情報付加に相当する。また、背景的事態には逆接的内容、対比、原因・理由、継起、付帯状況といったものがあるという点では、益岡隆志（1997）、庵功雄他（2001）とはほぼ同じ指摘だと考えられる。最後に、「主節の述語が要求する事態の提示」というのは益岡隆志（1997）で述べた「述定的装定」の表現だと考えてよい。

限定的名詞修飾（制限的名詞修飾）と非限定的名詞修飾（非制限的名詞修飾）は研究者によって言い方は違うが、内容の面では同じであると考えられる。本稿では日本語記述文法研究会（2008）で使われる「限定的名詞修飾」と「非限定的名詞修飾」を使う。また、被修飾名詞は主名詞とも呼ばれ、本稿では「主名詞」を使う。以上の説をもとに表にすると、以下ようになる。

表1 非限定的名詞修飾節の述語と主節の述語の関係（機能上）

主節の述語の 非限定的名詞修飾節の述語と 関係（機能上）		益岡隆志 (1997)	庵功雄他（2001）		日本語記述文法研 究会（2008）
			意味関係	動詞の制限	
	情報付加	対比・逆接	逆接・対比	なし	逆接的内容 ⁸⁾ 対比
		原因・理由	原因・理由	なし	原因・理由
		継起	継起	動作的な動詞に 限られ、タ形	継起
		付帯状況	付帯状況	結果状態を表す 動詞のテイル形 かタ形、または 形容詞	付帯状況
	情報付加な らざるもの	「述定的装 定」の表現			主節の述語が要求 する事態の提示 ⁹⁾

表2 非限定的名詞修飾節と主名詞との関係

	非限定的名詞修飾節と主名詞との関係
益岡隆志（1997）	名詞を文脈に導入するに当たって必要となる予備的、背景的情報（談話）
庵功雄他（2001）	聞き手に対してスムーズに情報伝達を行う上での配慮（会話）
日本語記述文法研究会（2008）	補助的な情報の付加

名詞修飾節には限定的名詞修飾節と非限定的名詞修飾節があり、非限定的名詞修飾節の機能から言えば、主名詞に対する働きは情報付加で、主節に対する働きは情報付加と情報付加ならざるものに分け、情報付加はさらに逆接・対比、継起、付帯状況、原因・理由に分けられるということになる。

以上はいずれも名詞修飾節の概観であり、具体的に名詞修飾節のル形、タ形、テイタ形、テイル形がどんな特徴をもつのかは明白ではなく、さらに追究する必要がある。本稿では、非限定的名詞修飾節のテイタに焦点を絞り、名詞修飾節と主節の意味関係を確認しながら、名詞修飾節のテイタの意味を考察してみたい。

3. 分析

非限定的名詞修飾節の概念について、日本語記述文法研究会（2008：85）は、被修飾名詞が主節の事態についての補助的な情報を付け加えたり、被修飾名詞が主節の事態に対しても背景的な事態を提示する修飾節を、非限定的名詞修飾節¹⁰⁾という、と説明している。まず、実例を通してテイタが含まれる非限定的名詞修飾節と主節との関係を確認しながら、名詞修飾節のテイタの意味との関連を見たい。それから、タ形が含まれる名詞修飾節と主節との関係に触れて比較してみる。

3.1 テイタ形が含まれる名詞修飾節と主節との関係

3.1.1 付帯状況

名詞修飾節の状態が主節の出来事と同時に存在することを表す（庵功雄他（2001））。非

⁸⁾ 日本語記述文法研究会（2008）は逆接的内容と対比を分けている。たとえば、日本語記述文法研究会（2008：89）には以下の例文がある。（1）は逆接的内容で、（2）は対比である。

（1）好き嫌いがほとんどない私だが、ナスだけは苦手だ。（逆接的内容）

（2）社交的で万事華やかな兄に比べ、弟は今一つぱっとしない。（対比）

つまり、主語がひとつである場合は「逆接」（逆接的内容）を表すのに対し、主語が二つ以上の場合、「対比」を表すということになる。

⁹⁾ 日本語記述文法研究会（2008）は、思考や認識を表す動詞の「気づく」「想像する」や、感情を表す動詞の「感動する」「うらやむ」「失望する」など、及び「捕まえる」「見る」「みかける」「目撃する」「出くわす」といった動詞は、何らかの事態を表す名詞節も補語になる、と述べている。この点では日本語記述文法研究会（2008）の考察は益岡隆志（1997）より詳しいと見られる。

¹⁰⁾ たとえば、日本語記述文法研究会（2008：85）には以下の例を挙げている。

（1）日本文学の最高峰とも言われる『源氏物語』は、外国でも盛んに研究されている。

この例では、名詞修飾節は「源氏物語」という名詞の指示対象を限定するためではなく、「源氏物語」についての補助的な情報を付け加えている、と説明している。

限定的名詞修飾節の「付帯状況」の機能については、以下のような例がある。

1) ふいに種一の机の上の電話が鳴った。そしてそのすぐ近くに座っていた種一が、ついうっかり受話器を取り上げてしまったのだ。

「はい」

と、種一は半分まだ笑いの残っている顔で受話器を握りしめ、そして瞬間的に白い無表情になった。
(「新橋烏森口青春篇」)

2) 女たちと一緒に立っていたアルさんは言った。
(「あした来る人」)

例(1)は「種一」が「座っていた」という状態が付随していると同時に「受話器を取り上げた」という動作を行ったことを表す。例(2)は「アルさん」が「言った」という動作に同時に付随する状態を名詞修飾節「女たちと一緒に立っていた」が表している。そして、二例とも主名詞が修飾節の中の述語および主節の述語の双方に対して主体の関係を持つことがわかる。つまり、例(1)では「種一」が「座っていた」主体であり、「受話器を取り上げた」主体でもある。例(2)では「アルさん」が「女たちと一緒に立っていた」主体であり、「言った」主体でもあると解釈できる。

庵功雄他(2001)では、この用法では名詞修飾節の述語は結果状態を表す動詞のテイル形かタ形、または形容詞であると指摘されている(表1を参照)。ほかに確かに「たたずむ」「みあげる」¹¹⁾といった例も検証できるが、名詞修飾節の述語は必ず結果状態を表す動詞のテイル形とは限らない。たとえば、

3) 昼食の時間だった。職員室でいつも通り弁当を食べる。皆の服装が違っている以外は日ごろと同じ光景なのだが、教師達もなんとなく浮ついているように見える。会話も多い。話題は職員対抗リレーにおける藤本の快走と、体育祭が終わった後どこへ飲みに行くかということ。どのチームが優勝するかという話は一切出ない。

仮装行列の話が出た。隣で食べていた藤本が私に訊いた。

「前島先生は酔っ払ったピエロだという話ですけど、本当に酒を飲むのですか。」

「まさか、中身は水だよ」
(「放課後」)

例(3)では、「藤本」が「私に訊いた」という動作を行ったときに「(昼食)を食べていた」という状態を付随している。ここで「食べる」は動作動詞(継続動詞ともいう)であり、「食べていた」は「動作の継続」の意味になる。主名詞が「食べる」という動作の継続の状態を付随していながら、主節の動作を行ったということである。また、「藤本」は名詞修飾節が述べる動作の主体にあたる(「藤本が食べていた」という関係にある)と同時に主節が述べる動作の主体(「藤本が私に訊いた」という関係にある)にもあたると解釈できる。また、次の例もそうである。

¹¹⁾ たとえば、以下のような例である。

(1) 改札口にたたずんでいた鈴木が私に気づいて手を振った。(日本語記述文法研究会(2008))

(2) 「いいお天気だわあ。」と、門柱に軽く寄りかかるようにして空を見上げていた由美が言った。

(益岡隆志(1997: 169))

4) 路傍で煙草を喫んでいた運転手が声をかけて来た。八千代が荷物を持っていないのを不審に思っている風であった。 (「あした来る人」)

この例も「運転手」が「声をかける」という動作に同時に付随する状態を名詞修飾節「路傍で煙草を喫んでいた」が表している。「運転手」は「煙草を喫む」主体であり、「声をかける」の主体でもある。ここでの「喫む」も動作動詞（継続動詞ともいう）であり、「喫んでいた」は「動作の持続」の意味になるのである。

以上の例から見れば、名詞修飾節と主節とが「付帯状況」の意味関係を持つ場合は、主名詞が修飾節の中の述語および主節の述語の双方に対して主体の関係をもつことがわかる。また、名詞修飾節のテイタの意味を見ると、テイタが動作の持続か結果の持続かの意味を表していると見られる。

3.1.2 逆接・対比¹²⁾

テイタが含まれる名詞修飾節と主節と対比の関係を表す例が多く見られる。たとえば、以下のような例である。

- 5) 奥へはいつて暫く姿を消していたマダムがまたやって来た。 (「あした来る人」)
 6) 向う側でフォークを動かしていた手が止まった。 (同上)

以上の例は、次の文のようにも表現できると思われる。

- 5) マダムは奥へはいつて暫く姿を消していたが、またやってきた。
 6) 手は向う側でフォークを動かしていたが、止まった。

以上の二つの例は名詞修飾節の述語と主節の述語の間に対比の関係を表している。例(5)は「姿を消す」と「来る」で、例(6)は「動かす」と「止まる」で主名詞前後の動詞が対比の意味を持っている。そして、二例とも主名詞が名詞修飾節との間に主体関係があり、主節との間にも主体関係があることが分かる。すなわち、例(5)は「マダム」が主体で、「マダムが奥へ入っていた」、「マダムがまたやってきた」という関係にあり、例(6)は「手」が主体であり、「手が向う側でフォークを動かしていた」、「手が止まった」という関係にある。

また、ここで名詞修飾節のテイタの意味を見ると、中畠孝幸(1995)、王守利(2014)では「途切れ」の意味を表していると主張されている。つまり、例(5)は「マダム」の「姿を消していた」状態が途切れて、「来た」という新しい事態が生じた。例(6)は、「手」が「動かしていた」状態が途切れ、「止まった」という新しい状態が生じたわけで、いずれも名詞修飾節で表された事態がその後打ち消され、主節において対照的な事態が生じているのである。そして、「マダム」「手」が動作の主体であり、主体の状態の変化が見られ

¹²⁾ 厳密に言えば、テイタが含まれる名詞修飾節と主節の述語の関係が「対比」であり、「逆接」ではないが、ここでは「対比」と「逆接」の区別をしない立場に立っている。注18を参照。

る。

益岡隆志（1997）、庵功雄他（2001）、日本語記述文法研究会（2008）は、ほとんどの例は主名詞と名詞修飾節との間および主節との間に主体の関係にある例を挙げている。本稿は以下のような例を「対比」とも認める。次の例を見られたい。

7) その長い間放擲していた私の仕事を再び取り上げるために、一人きりにはなりたし、そうかと言ってあんまり知らない田舎へなぞ行ったら淋しくてしょうがあるまいからと言った、例の私の不決断な性分から、この土地ならそのすべてのものが私にさまざまな思い出を語ってくれるだろうし、そして今時分ならまだ誰にも知った人には会わないだろうしと思って、こんな季節はずれの六月の月を選んで、この高原へわざわざ私はやって来たのであった。
（「美しい村」）

8) すると伯父は持っていたフォークを置いて、そんなけちな事を考える必要はないと言った。お前のお母さんはまだ若いし、元気だ。学資はいままで通りに続けてやるから、やれる所までやってみろ。お前にそれだけの能力があるものならば、能力の限りを発揮するのが正しい生き方というべきだ。
（「青春の蹉跌」）

この場合は、例（7）は名詞修飾節の述語「放擲していた」と主節の述語「取り上げる」の間で、例（8）は名詞修飾節の述語「持つ」と主節の述語「置く」の間で、名詞修飾節の状態と主節の状態が対比的な意味を表している。

二つの例は主名詞と名詞修飾節との間および主節との間に対象の関係にある。つまり、例（7）は「私の仕事をその長い間放擲していた」「私の仕事を再び取り上げる」という関係で、例（8）は「伯父はフォークを持っていた」「（伯父は）フォークを置いた」という関係である。仕事が長い間放擲されていた状態が途切れ、再び取り上げられるという新しい状態に入り、フォークが持たされていた状態が途切れ、置かれるという新しい状態が生じたと解釈でき、いずれも対象の状態の変化が記述されている。名詞修飾節のテイタの意味も「途切れ」だと考えている。

以上の例は名詞修飾節の述語と主節の述語との対比の関係を見たが、主名詞と名詞修飾節との関係と、主名詞と主節との関係とは一致していることがわかる。しかし、そうではない場合もある。

9) 受話器を片手で押さえ、種一は世にもアワレ、というような顔をして我々を見回した。それから慌てて受話器を覆っていた手を離し、「あっ、わかりましたですう」と言った。
（「新橋烏森口青春篇」）

10) 彼らがやってきたからなのか、藤本はいままで前かがみになっていた体をおこし、背をそらせ気味に座りなおすと、ポケットからショートピースの箱をひっぱり出した。
（「新橋烏森口青春篇」）

例（9）は主名詞「手」は名詞修飾節が述べる動作（「覆う」）の手段（道具）に当たり（「手で受話器を覆っていた」）、主節が述べる動作（「離す」）の対象にあたる（「手を離す」と解釈できる。一方、例（10）は、主名詞「体」は名詞修飾節が述べる状態（「前かがみ

になっていた」)の主体にあたり(「体がいままで前かがみになっていた」)、主節が述べる動作(「起こす」)の対象にあたる(「体をおこす」)と解釈できる。主名詞と名詞修飾節の述語との関係と、主名詞と主節の述語との関係とは一致していないが、同じく主名詞の状態の前後の変化が見られる。この場合は名詞修飾節のテイタも途切れを表すものだと考えている。

3.1.3 原因・理由

たとえば、以下のような例である。

11) 去年の検査で第二乙種合格を申し渡されていた私には今日明日にも令状のくる心配があった。
(益岡隆志 (1997: 169))

12) そこへ娘たちが、にぎやかに笑いさざめきながら近づいてきた。娘たちは倒れている王子を見つけ、走り寄って抱き起こした。それを岩陰から眺めていた人魚姫は、取り残されたような思いで悲しくなった。王子が娘たちの手で白い寺院の中に運びこまれてしまうと、姫はしょんぼりして海の底のお城へもどっていった。

(「本当は恐ろしいグリム童話」)

以上の二例はともに名詞修飾節の部分は主節の事態が起こる原因・理由を説明している。例(11)は「私は去年の検査で第二乙種合格を申し渡されていたので、今日明日にも令状のくる心配があった。」で示されるような因果関係を表す文と同じ内容を表している。例(12)もそうで、「人魚姫は娘たちが倒れている王子を見つけ走り寄って抱き起こしたことを岩陰から眺めていたので、取り残されたような思いで悲しくなった。」という因果関係を表す文と同じ内容であることが見て取れる。また、二例からわかるように、主節の述語は「心配する」「悲しくなる」は内的情態動詞であることにも共通点が見られる¹³⁾。

この場合は主名詞と名詞修飾節の述語の関係は主体の関係にあり、主節の述語との関係とも主体にある。また名詞修飾節のテイタはパーフェクトの用法が見られる。つまり、名詞修飾節で表されている事態が因となり、後ろの主節の事態(果)に導くことで、過ぎ去ったことが後にも効力が続いていることがわかる。

3.1.4 継起

庵功雄他(2001)は、名詞修飾節の出来事が終わってから主節の出来事が起きたことを表し、名詞修飾節の述語は動作的な動詞に限られタ形を取る、と指摘している。たとえば、

¹³⁾ それに対し、タ形が含まれる名詞修飾節と主節と「原因・理由」を表す場合は、主節の動詞は内的情態動詞がありうるが、動作動詞もありうる。次の例文を見られたい。

(1) 最愛の息子を失った彼女は、人生に絶望した。(佐良木昌、新田義彦 (2008))

(2) 人生に絶望した彼は海に身を投げた。(同上)

(3) 煙草をやめた高木はストレスのためかよく食べる。(庵功雄他 (2001: 388))

(4) 風邪を引いた渡辺は学校を休んだ。(庵功雄他 (2001: 389))

このように、タは、名詞修飾節と主節とにどちらか内的情態動詞がある場合のほか、どちらも動作動詞の場合もある。それに対し、テイタは、今集めた例文を見る限り、主節に内的情態動詞がある場合が多く見られる。これに関しては、これからも多くの例文を集めた上で検討を続けたい。

以下の例文は典型的であり、夕形のみを取っている。

- 13) 昼食を食べた大下は急ぎの仕事をしに会社に戻った。 (庵功雄他 (2001: 388))
 14) 非常呼集を受けた警官はすぐ現場に赴いた。 (佐良木昌、新田義彦 (2008))
 15) 裁判所から出てきた被告は新聞記者たちに取り巻かれた。
 (佐良木昌、新田義彦 (2008))

(13) は「大下」が「昼食を食べた」あとで「会社に戻った」ことを表し、(14) は「警官」が「非常呼集を受けた」あとで「現場に赴いた」ことを表し、(15) は「被告」が「裁判所から出てき」てから、「新聞記者たちに取り巻かれ」ることが可能になった。名詞修飾節と主節との間にいずれも時間的な継起を表している。一方、庵功雄他 (2001: 389-390) では次のテイタを取る一例だけを挙げている。

(8¹⁴) = 16) 荷物が届いたとき、すでに倉庫に到着していた田中係長は手際よく荷物を運び入れた。 (庵功雄他 (2001: 390))

庵功雄他 (2001) は、(8) は継起とも理由とも解釈が可能であると述べているが、話の脇筋(ここで、「すでに倉庫に到着していた」を指す)を名詞修飾節で表現することによって、本筋(ここで、「荷物が届いたとき、田中係長が荷物を運び入れた」を指す)を明確にするためだという談話における働きをも主張している。名詞修飾を用いなければ次のように表現される。

(16') 荷物が届いたとき、田中係長はすでに倉庫に到着していて手際よく荷物を運び入れた。

益岡隆志・田窪行則 (1992: 115) は、テイル形はまた、動きが完了していることを表すことができる。「もう」「すでに」「まだ」(否定表現の場合)などが用いられると、完了状態の意味がより明確である、と述べている。本稿の立場としては、「すでに到着していた」は、到着した結果の持続の「状態」と見られ、「運び入れた」という「動作」との組み合わせは、物事が相次いで起こるという典型的な「継起」関係といえない。ほかにこのようなテイタが「継起」を表す例文がまだ確認されていないため、本稿は一応「継起」の関係を認めない。

このように、夕形の場合は、名詞修飾節と主節と「継起」の関係を顕著に表すことができるのに対し、テイタが含まれる名詞修飾節と主節と「継起」を表す典型的な例文はめったに見られない¹⁵⁾。これは、夕形は完成相として基本的な意味が動作のまるごとのすがた

¹⁴⁾ (8) は庵功雄他 (2001) の例文の引用番号である。

¹⁵⁾ テイタが含まれる名詞修飾節と主節との関係は、すべて時間的な前後の関係に見えるが、「途切れ」の用法の基本は、名詞修飾節の動詞が動作や状態の継続していた状態が中断し、新しい状態(新しいといっても、前の動作や状態と対照的に見られる動作や状態しか続かない)になるため、「継起」のように見える一方で、典型的な「継起」とはいえない。前の動詞の動作や状態の局面が「終結」しなければ、「継起」とはいえないと考えられる。

を表し、前の動詞の動作が完結してから、次の動詞の動作が続く（つまり、「継起」になる）のがごく自然のことだからである。一方、テイタは、継続相として動作や変化の状態（局面）の中にあるすがたを示しており、動作間の「継起」関係を表しにくい。

3.2 タ形が含まれる名詞修飾節と主節との関係

テイタ形が含まれる名詞修飾節と主節との関係を対照させるため、ここでは、先行研究を踏まえ、タ形が含まれる名詞修飾節と主節との関係について簡略に説明する。非限定的名詞修飾節の述語と主節の述語の関係について、益岡隆志（1997）、庵功雄他（2001）、日本語記述文法研究会（2008）などは「付帯状況」、「逆接・対比」、「原因、理由」、「継起」に分けているとすでに述べた¹⁶⁾が、テイタ形とタ形とともに、名詞修飾節と主節とは「付帯状況」、「原因・理由」¹⁷⁾を表している。一方、テイタ形の場合は、「継起」の関係を表さないのに対し、タ形の場合、「継起」の関係を顕著に表していることがわかる。それから、「逆接・対比」については、形容詞、形容名詞や名詞の過去形の例は多く見られるのに対し、動詞の例はあまり多くない。動詞のタ形はたとえば以下の例である。

17) 殺人を犯した暴力団メンバーは罪の意識が全くない。（佐良木昌、新田義彦（2008））

名詞修飾節の「殺人を犯した暴力団メンバー」は、「罪の意識がある」ことが当然だと普通に考えられるため、主節の「罪の意識が全くない」と対照的になっている。これは、テイタ形の「逆接・対比」とは意味が異なる¹⁸⁾。タ形の場合は、名詞修飾節の動詞は「動作の完了」の意味を表しているのに対し、テイタ形の場合は動詞が「途切れ」の意味を表している。

18= 6) 奥へは行って暫く姿を消していたマダムがまたやって来た。（「あした来る人」）

このように、同じく「逆接・対比」といっても、アスペクトの意味が違うことがわかる¹⁹⁾。

¹⁶⁾ タ形だけについて佐良木昌、新田義彦（2008）は連体節の主節述語の意味的なかわりを「時」、「時間的継起」、「原因・理由」、「付帯状態」、「相反」に分類した。比べてみれば、「時」が新しい関係として確認できた。たとえば、

(1) 人ごみの中に私をみつけた父は「おい！」と叫んだ。

→ 父は人ごみの中に私を見つけたとき、「おい！」と叫んだ。

(2) 20年ぶりに再会した二人は感窮まって号泣した。

→ 二人は20年ぶりに再会したとき、感窮まって号泣した。

しかし、例（2）は「原因・理由」とも解釈できる。「時」についてはまだ検討する余地があると考えられる。テイタの例がまだ確認できていないこともあり、今後の課題としたい。

¹⁷⁾ 同じく「原因・理由」を表すといっても、注（13）にも見られるように、各々の特徴があるもわかる。

¹⁸⁾ 厳密に言えば、((5) (6) などのような) 名詞修飾節のテイタの特徴は、名詞修飾節の事態と主節の事態と対照的に見られる点にあり、構造上で前後動詞の「対比」のほうがもっと正確なのだといえる。それに対し、(17) のような名詞修飾節におけるタの特徴は意味的面で「逆接」といったほうがもっとふさわしい。そうすると、「逆接」と「対比」の定義と区別を正確に決める必要があるのではないかと思われるが、これについては今後の課題とし、本稿では「逆接・対比」の細かい区別をしていない。

¹⁹⁾ アスペクトの意味は動詞の性質に関わっている。どんな動詞が出てくるか、それからその場合のアスペクトの意味はどうなるかはまだ追究する余地がある。

3.3 まとめ

先行研究を踏まえ、非限定的名詞修飾節と主節との関係を確認しつつ、名詞修飾節のテイタの意味を考察した。結果を表にすると、以下のようになる。

表3 非限定的名詞修飾節と主節との関係および名詞修飾節のテイタの意味

非限定的名詞修飾節と主節との関係	主名詞と名詞修飾節との関係①	主名詞と主節との関係②	①と②の関係	名詞修飾節のテイタの意味
付帯状況	主体	主体	一致している	動作の持続 結果の持続
逆接・対比	主体、対象、手段（道具）	主体、対象	一致している場合もある 一致していない場合もある	途切れ
原因・理由	主体	主体	一致している	パーフェクト

表3から分かるように、非限定的名詞修飾節と主節の関係によって、名詞修飾節のテイタの意味が違っている。また、非限定的名詞修飾節と主節との関係が「付帯状況」「原因・理由」である場合は、主名詞と名詞修飾節の関係と、主名詞と主節との関係とは、主体にあることが分かる。これは、主名詞である主体が主節の動作を行うときに、主名詞に対して補助的な情報を付け加えたりするときはどんな状況で行ったか、「付帯状況」、どういう原因で主節の事態に導いたのか（原因・理由）、などがよく考えられるためであると思われる。また、主名詞である主体や対象については、名詞修飾節が表される状態と主節が表される状態と対照的に見られるように（「逆接・対比」）、名詞修飾節で主名詞の前の状態を提示していると考えられる。それから、タ形が含まれる名詞修飾節と主節との関係と対照してみれば、タ形は「継起」の関係を顕著に表しているのに対し、テイタ形は「継起」の関係を表さない。一方、テイタ形と（動詞の）タ形は「逆接・対比」の関係を表しているが、アスペクトの意味が違うことも窺える。

3.4 非限定的名詞修飾節と主名詞との関係

先行研究では（表2を参照）、非限定的名詞修飾節と主名詞との関係は必要となる背景的情報の付加であるとしている。これについても以下の例文で確認してみた。

- 19) 或る日私がそんな散歩から帰って来ると、庭掃除をしていた宿の爺やに呼び止められた。
「細木さんはいつ頃こちらへお見えになります？」
「さあ、僕、知らないけれど……」 （「美しい村」）

20) それらしいものはすぐみつかった。市役所の隣の八角形のシルエット。信じられないことに、〈市役所別館〉とある。「嘘だっ！！」思わず大声で叫んでしまった。たまたまそばを歩いていた見知らぬおばさんが、わたしの叫びに驚いて振り返る。恥ずかしくて笑顔でごまかすと、むこうもすぐ目をそらして足早に立ち去っていく。不思議だ。わ

たしの大声には驚いても、あの塔には驚かないんだ…。 （「実録・カトレア寮の怪」）

以上の例は、もし名詞修飾節の説明がないまま「宿の爺や」「おばさん」だけが出てくるとあまりにも唐突になるだろう。小説では、はじめて出る人物が読者に分かりやすく理解してもらうため、主名詞に対し背景説明の内容が必要になる。小説の中では、この用法が頻繁用いられているのである。これは、話（流れ）をスムーズにするために、名詞修飾節の述語は主名詞だけに必要な補助的な情報を付け加えているのであり、主名詞に関わり、主節の述語とは関係ないと見られる。

4. まとめ

本稿は非限定的名詞修飾節と主節との意味関係からテイタが含まれる名詞修飾節と主節の関係を確認しながら、非限定的名詞修飾節におけるテイタの意味を考察してきた。

テイタが含まれる非限定的名詞修飾節と主節との関係としては、付帯状況、逆接・対比、原因・理由などが挙げられる。また、非限定的名詞修飾節と主節の関係によって、名詞修飾節のテイタの意味が違っていることが分かった。具体的にいうと、「付帯状況」の場合は、名詞修飾節のテイタが「動作の持続」「結果の持続」の意味を表し、「逆接・対比」の場合は、名詞修飾節のテイタが「途切れ」の意味を表し、「原因・理由」の場合は「パーフェクト」の意味を表す（表3を参照）。また、タ形が含まれる非限定的名詞修飾節と主節との関係との比較にも触れた。タ形が「継起」の関係を顕著に表しているのに対し、テイタ形は「継起」の関係を表さない。一方、テイタ形と（動詞の）タ形は「逆接・対比」の関係を表しているが、アスペクトの意味が違うことも窺える。最後は非限定的名詞修飾節と主名詞との関係について検討した。

5. 今後の課題

以上は、テイタが含まれる非限定的名詞修飾節と主節との意味関係およびテイタの意味を考察したが、テイルが含まれる非限定的名詞修飾節がどうなるのかは、さらに考察を重ねる必要がある。たとえば、次の例を見られたい。

21) 梶は今まで結んでいたネクタイを解いて、赤いネクタイに結び替えた。

『あした来る人』

22) 杏子は、笑いながら言うと、子犬の首輪とかごとを結びつけているリボンを解いた。

（同上）

例（21）は、テイタが含まれる非限定的名詞修飾節と主節と「逆接・対比」の関係を表す例で、例（22）は、テイルが含まれる非限定的名詞修飾節と主節と「逆接・対比」の関係を表す例である。以上の二例は、いずれも名詞修飾節で表された事態がその後打ち消され、主節を起点として対照的な事態が生じている。そして、被修飾名詞（ネクタイ、リボン）の状態にも変化が見られる。

しかし、例（21）のテイタはテイルに置き換えることができないのに対し、例（22）ではテイルをテイタに置き換えても意味が変わらない。例（21）は被修飾名詞「ネクタイ」

が名詞修飾節の述語「結んでいた」に対して対格の関係を持っていると同時に、主節の述語「解いた」に対しても対格の関係を持つ。つまり、「ネクタイを結んでいた」、「ネクタイを解いた」という関係にある。それに対して、例(22)では、被修飾名詞「リボン」が名詞修飾節の述語「結び付けている」に対して主格の関係をもち、主節の述語「解いた」に対して対格の関係を持つ。つまり、「リボンが子犬の首輪とかごとを結びつけている」、「リボンを解いた」という関係にある。この格関係の一致と不一致が、テイルとテイタの選択に影響を与えているのか否か、さらに検討していく必要がある。

テイル(およびタ形)が含まれる非限定的名詞修飾節と主節との関係が明らかにされない限り、テイタの特徴もはっきり見られないのではないと思われる。これを今後の課題としたい。

参考文献

- 秋月康夫(2003)「「テいたところ」が表す局面としての「途切れ」相」『日本語教育』(117)pp. 53-62, 日本語教育学会.
- 庵 功雄(2001)『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える—』. スリーエーネットワーク.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(監修:白川博之)(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 岩崎 卓(2001)「複文における時制」『言語』30-13, pp. 50-55, 大修館書店.
- 王 守利(2014)「実質名詞修飾節におけるテイタに関する一考察」『人文社会科学研究』(28), 千葉大学大学院人文社会科学研究科 pp. 190-204
- 大島資生(2003)「連体修飾の構造」北原保雄(編)『朝倉日本語講座5 文法I』, pp. 90-108, 朝倉書店.
- 加藤万里(2005)「日本語の制限・非制限修飾に関する一考察」『日本語文法』5-1, pp. 3-19, 日本語文法学会.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』, ひつじ書房
- 金田一春彦(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房.
- 佐良木昌, 新田義彦(2008)「主節主名詞に係る連体修飾節と主節述部との意味的相関の分析: 連体節と英語文型との対照」『電子情報通信学会技術研究報告』2008-1, pp. 49-53. 電子情報通信学会
- 須田義治(2005)「連体形のテンス・アスペクトについて」『沖縄大学人文学部紀要』(6), 沖縄大学人文学部 pp. 15-24
- 高橋太郎他(2003)『日本語の文法』ひつじ書房.
- 寺村秀夫(1980)「名詞修飾部の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座第2巻 文法』, pp. 221-266, 大修館書店.
- 寺村秀夫(1984)『シンタクスと意味 第Ⅱ巻』, くろしお出版.
- 中畠孝幸(1995)「現代日本語の連体修飾節における動詞の形について—ル形・タ形・テイル形・テイタ形—」『人文論叢』三重大学人文学部文化学科研究紀要. pp. 23-32
- 日本語記述文法研究会(2007)『現代日本語文法3 アスペクト・テンス・可否』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版.
- 丹羽哲也(2001)「連体修飾節のテンスとアスペクト」『言語』30-13, pp. 56-62, 大修館書店.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 益岡隆志(1994)「名詞修飾節の接続形式—内容節を中心に」田窪行則編『日本語の名詞修飾表現』, pp. 5-27, くろしお出版.
- 益岡隆志(1997)「連体節の表現と主名詞の主題性」益岡隆志『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版.
- 三原健一(1992)『時制解釈と統語現象』くろしお出版.

用例出典

- 『中日対訳コーパス』(2003 第一版)(北京日本学研究中心):『あした来る人』
- 新潮文庫:『青春の蹉跎』『美しい村』『こころ』『新橋烏森口青春篇』『普請中』
- 東野圭吾(1988)『放課後』講談社文庫
- 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」中納言